

経済倶楽部講演 2

経済倶楽部講演

2月号目次

講演：中国の近況と日中関係

経済倶楽部講演 2月号-1975.02.00



中国の近況と日中関係

中嶋嶺雄

肝臓よもやま話

高橋忠雄

50年経済の展望と着目点

高橋亀吉

マスコミの偏向報道について

白井浩司

中国の近況と日中関係	中嶋嶺雄…… 2
肝臓よもやま話	高橋忠雄……37
50年経済の展望と着目点	高橋亀吉……74
マスコミの偏向報道について	白井浩司…106
喫煙室	宮川三郎…134
中央会だより	……………136

中国の近況と日中関係

東京外語大学
助教授

中嶋嶺雄

- * 全国人民代表大会は開かれるか
- * なぜ国家主席が決められないのか
- * 批林批孔運動の性格
- * 政治からの逃避傾向
- * 軍の動向
- * 反潮流・反復辟
- * 毛沢東と周恩来
- * 「五七二工程紀要」の意味するもの
- * 毛沢東の反撃―揚秦反儒の運動
- * 毛・周以後への移行期に入った中国
- * 日中貿易に暗影
- * 外貨不足に悩む中国
- * 資源・食糧・人口・海洋権問題での中国の立場
- * 日台問題はそう簡単ではない
- * 日中平和友好条約と中ソ関係



(2)

宮川 お待たせいたしました。(拍手)

最近、ご承知のとおり、三木内閣ができませんで、これから新しい外交関係が発足するとは思っています。でございますけれども、皆さまもご承知のとおり、惟名副総裁をはじめとして、日台関係に多少みんな気心の向いている人たちも何人かおられますので、いったい日中の外交関係はいくらかでも変化があるのかどうか、気にしておる際でございますが、近ごろ新聞などでは、あまり中国の記事ができません。しかし、音沙汰ないようでありますけれども、中国の内部には相当な動きもあろうかと考えるのでありまして、その辺のことをしばらく中国の事情を聞いておりませんので、中嶋先生に最近の日中関係の動きを伺いたいと思うてお招きいたしました次第でございます。しばらくご静聴

をお願いいたします。(拍手)

中嶋 (拍手)私、いまから一年ぐらい前にここで台湾の将来に関連いたしましたとお話いたしました。そのときの私の感じ方は、台湾そのものが、当時のセンチショナルな台湾の将来に対するいくつかの憶測にもかかわらず、いわば現状維持的な方向にむしろかたまつてゆくのではなかつたかというふうな見方から、いくつかの例をあげてお話ししたわけでありました。

そこできょうは、最近の中国の内政と外交関係、とくに日中関係に関連した話をせよ、ということでございます。

全国人民代表大会は開かれるか

ご承知のように、中国に関する記事はこのとこ

(3)

ろちょっと下火になっているように思われます。しかしながら、実はどの新聞も、全国人民代表大会がいつ開かれるのかということ待ち望んでいるような状況です。

しかしながら、考えてみますと、全国人民代表大会というのは、もういつも、開かれるのではないか開かれるのではないか、といわれておりました。依然として今日まで開かれていないわけです。私はそのたびに、まだまだ開かれたいだろうという少数意見を固持してきましたけれども、どうも今日までのところ開かれておりません。

で、皆さん自身もご承知のように、中国の首脳者自身がこれまで、文化大革命の收拾の段階でも近く全国人民代表大会を開くといいましたし、『人民日報』の社説などもそのことをうたいます

全国人民代表大会といえますと、建前上は、これはいわば中国の国会でございます。現在の中国は一応、憲法を形のうえでは依然として持っているわけですから、その形に従えば、一院制の国会に相当するわけです。全国人民代表大会において、国家主席を選出し、その選出された国家主席が、いわば閣僚の任命をし、それを全国人民代表大会で承認を求めたり、あるいは国家の五カ年計画のみならず、その年の当然の予算と前年度の決算を承認したり、対外的に結んだ条約を国家主席の名において調印した条約の批准を求めるといふ、いわば日本でいうと、ちょうど国会での条約批准に相当するような手続きも行なわれなければいけないわけでございます。そういうのもろもろの国家的行事であります。

し、それから、現に昨年の夏の十全大会（第二〇回党大会の席上では、周恩来総理がことあらためて全国人民代表大会の開催が近いということをつたわけてございます。

その後、最近でも、中国を訪れた日本の若干の代表団に鄧小平副総理が、近く開催されるようなことを漏らしておりますけれども、どうもそれも確定的なものだとはいえないように思うわけでございます。いわばこの日本の新聞などがそういう期待のもとで、これまで何回も全国人民代表大会の開催間近し、ということ解説してまいりましたけれども依然として開かれていない。

なぜそれでは、その「全人代」の開催というものがそれほど困難なのか、という問題にぶつからざるをえないわけでございます。

ところが、中国ではこれが、一九六四年の一月の終わりから六五年の一月初頭のちょうどいまから一〇年前に行なわれただけで、この一〇年間、いわば国会というものがまったく開かれないうままにすべてのことが推移しているわけでございます。

こういうふうに考えてみますと、当り前のものが実は開かれなかったがゆえに、いつ開かれるかという問題が非常にクローズアップされることになったと思うのです。

ただし、いまから一〇年前、それまでも毎年開いてきていたわけではなくて、非常に不規則な開催の仕方になっておりましたけれども、とにかく一二月の終わりから一月にかけて開かれました。そうしますと、最近の状況からして、近く全国人

民代表大会の開催があるかもしれません。この点ももちろん予測しかねるわけですが、とにかくこれまではその開催というものが非常に困難であったように思います。

なぜ国家主席が決められないのか

最近の中国では、ご承知の批林批孔運動、去年の夏以来の孔子批判、林彪批判の運動がやはり一つのヤマ場を過ぎたような状況がありまして、むしろ最近の強調点はその党・軍・民（人民）の統一と団結ということが非常に叫ばれているわけでございます。なぜいまごろになってこれほど統一と団結が強調されなければならないのか、去年のいまごろですと、まさに批林批孔運動こそ文化大革命の成果を継承し、中国が新しく発展するための

最も重要な運動であったとまでいわれたいわけですが、最近の強調点は、むしろ統一と団結の方向に移っているわけでございます。これはどうも批林批孔運動というものがあまり多くの成果をあげないままに、再び統一と団結を強調することによって、できれば全国人民代表大会を開き、そうして、そこで選ばれた国家的な体制のもとで、いよいよ中国自身がこの毛沢東以後への備えをしようとしているのではないかと思われるわけです。こういう観点は、実はわりあつて中国の動きというものをそのまますなおに受けとめた見方だということがいえると思います。

しかしながら、一方考えてみますと、これまでも開こうと思えば、全国人民代表大会というのは国会ですから当然開かれなければいけないので

あって、これは開けたわけでございます。私はそれほどその開催がむずかしいというものではなかったと思う。それがやはりできなかったということは、依然としてやはりその指導層の内部に、全国人民代表大会によって決定される大きな事項に關しての意見の食い違い、考え方の食い違いというものがずうっと底流してきたからではないかと思われるわけです。

そのいちばん大きな問題というのは、いうまでもなく、従来の憲法の建前からいえば、国家の主席を誰にするか、つまり劉少奇なきあとの国家主席を誰にするかということでありましょう。もとより、その後、伝えられた憲法草案なるものによりますと、従来の憲法のように国家主席というようなことを設けないで、国家元首というものを設

けて、まさに国家と党とを両方を一元化したような形で毛沢東をそこに当てるんだというふうな憲法草案が現に中国の中で検討されたことも事実だろうと思えます。いずれにしても、そういう底流が一方にあった。このことはどういうことを意味しているかという点、やはり毛沢東が劉少奇なきあとに他の指導者を国家的なレベルにおける最高統帥とすることに、やはり不満である。それをしたくないという意図のあらわれではないかと思うのです。かりに国家元首ということでもこのことはいえるわけでありまして、劉少奇なきあと中国はまさにずうっと一貫して国家の主席が存在していません。ですから、秘密な意味でいえば、たとえば日中平和友好条約が結ばれたとき

に、これはやっぱり国家主席が調印しなければおかしいわけでして、それを全国人民代表大会で批准しなければおかしいわけですけれども、そういう手続きがとられておりません。ですから、國務院総理である周恩来がこれに出てきているわけでありすけれども、いずれにしてもそういう国家体制の不備からしますと、党においては、毛主席がとにかく一元的な指導をするにせよ、国家の頭として誰が坐るかということはずうっとペンディングになってきていたわけでありす。

しかも、考えてみますと、周恩来こそ、あらゆる意味において、中国の指導者の中でまさに国家を代表する顔としての位置を持ってきたと思えますし、周恩来が意識しているのは、常にそういう国家的なワク組みの中における行動であり、使

林批孔運動に対する私の見方も出てくるわけでございます。

批林批孔運動の性格

さて、そこでこの批林批孔運動ですけれども、どうも今回の批林批孔運動というものは明白な路線というものがそこにあらわれなかったように思ふんです。『人民日報』や『紅旗』を見まして、いくつかの論文を分析してみますと、そこにはたしかにこの個人崇拜や毛沢東体制というようなものを批判した論文も見られますし、また逆に、明らかに周恩来批判と見えるような論調もまた非常に多いわけでございます。むしろ全体のトーンは、周恩来批判にあったと私は考えています。これについてはもういろいろながいわれており

命感ではなかったかと思うのです。

こういうことを考えますと、まさに周恩来というのは誰が見ても国家主席になるのにふさわしい人物でして、だとするならば、もしも毛主席がそれをサポートすれば、全国人民代表大会というのはその線でまとまる、というふうに考えるのが当り前ではないかと思うんです。それがどうもこれまでまとまらなかったというところに、実は大きな問題があるのではないか、というのが私の仮説でございます。

この私の仮説というものは、実は毛沢東と周恩来との間に非常に大きな意味での矛盾・対立関係というようなものが存在しているのではないかと、この伏線の問題の伏線になるわけでございまして、この伏線のうえで、たとえば後にお話しします批

ますので、ここでは省略いたしますけれども、とにかく、あからさまに語ってはいないものの、その目ざすところは周恩来批判であるというような論文も非常に多かったです。しかしながら、いずれにしてもその決定打というものが出ずに今日にまで至っている。つまり、批林批孔運動というものはかなり不透明なあいまいなまま推移してむしろ決定打が出ずに、いまや再び統一と団結ということが叫ばれているというふうに見えていいのではないかと思うのです。

もちろん、今日の中国の指導者たちは、中国でこんにち、孔子を批判することの意味は非常に重要なんだ、ということ強調するでしょうし、たしかに儒教思想が持ってきた意味からしますと、そのこともわかるんですけれども、それではなぜ

孔子という中国の伝統思想と林彪という、まさについ先だってあのような形で失墜していった人物、しかも林彪はあれほどたたえられた文革の功労者で、毛沢東主席の後継者でありましたけれども、その林彪を批判するという非常にまぐさい政治的な批判運動とがどうしていまドッキングしなければいけないのかという、その論理も実は明確でないわけであります。

しかも最近では、孔子批判の材料の中に、林彪がいかに孔子、孟子の教えを吹き込もうとしたか、そういう反動的封建的な人物であったかということを示す材料が『人民日報』などに出るわけですけれども、これはまた実は毛沢東主席についてのもいえることでありまして、皆さんもご承知のように、『毛沢東選集』をお読みになります

治的な理由というものをこれから話しする前に、批判運動がもたらされなければいけないかった当時の全般的な状況をもう一べんふり返ってみたいと思います。

政治からの逃避傾向

それはまず第一に、文化大革命というものがあれほどの激動を伴い、価値観の変革を訴えながら、結局は十分な目標を達せずに途中から修正されざるをえなかったことです。しかもこの過程では林彪事件という非常に衝撃的な事件が起こりました。このために、一般大衆の中にはかなり政治に対する不信感が広まった。もともと中国人というのは、ご承知のように「帝力いずくんぞわれにあらんや」というような政治観を持っているわけ

と、孔子や孟子からの引用が非常に多いんです。

現に私が調べてみましたところ、とくに孟子からの引用も非常に多いわけですし、『論語』のいちばん冒頭にある有名な一句「学びて時にこれに習う、また説ばしからずや。朋あり、遠方より来たる、また樂しからずや」ですね、これなども毛沢東は選集の中に引いているわけでした、その責任は実は毛沢東主席も問われなければいけない。それが非常に不自然な形で昨年の夏以来急激に、初めは批修整風とっておりました。やがて批林整風、それから批林批孔というふうに発展してくるわけですけれども、なぜそういう運動になってきたのか、これはやはり中国の状況を見ますと、明らかに政治的な理由がその背景にあったというふうに私は考えざるをえないわけです。で、その政

ですから、そこへもってきて、たとえば、文化大革命であれほどたたえられて、毛主席の後継者だとして紹介され、民衆の前にあれほど二人が和氣あいあいと肩を組んでいた片方が片方を暗殺しようとしたんだ、というふうな、ああいう事態を教えられますと、そこに民衆たちは、政治権力に対して、日本という政治不信とはもって違った意味で、まさに「帝力いずくんぞわれにあらんや」という感じにならざるをえない、そういう不信感が非常に根強く存在していたわけです。

それから、この問題はとくに青年層にとってみますと、文化大革命のときに紅衛兵運動としてクローズアップされた青年たちは、その多くが農山村に下放させられまして、生産建設兵団とか、いくつかの集団的な下放運動に行くことになるわけ

ですが、どうも農民との間がしっくりいかないものがある。で、多くの青年は都市へ還流してきたりしまして、なかには、いくつかの非行青年的な事例を巻き起こしたりもしました。これらは『人民日報』などにも紹介されていることであります。

そして、とくにこの青年層の中で、いわば各級の中堅幹部クラスになりますと、政治の変化というものが非常に激しいために、いわば政治から逃避したいという一種のアパシーと申しましょるか、無関心と申しましょるか、そういう状況がかなり根深く存在していたわけです。今日、香港に海を泳いで渡ってくる青年たちにもこの傾向が非常に強いことはいうまでもありません。香港への難民について一言申しますと、最近その数が非常に

に多いために、不況で失業者の多い香港の政庁は、以後、難民を本土へ送り返すことで中国側とついで、三週間前に合意したという事実があります。ともかく、いま申し上げたような一般的な雰囲気が存在していたということは否定できないわけです。これはいつのときでも大きな政治的事件のあとには必ずそういう一種の虚脱状態があるというのは常識かもしれませぬけれども、とくにその文化大革命から林彪異変という変動が激しかっただけに、この中国における大衆や青年層の政治への不信、あるいは逃避という傾向があったことはいうまでもございませぬ。

軍の動向

それから、二番目の問題としましては、軍の離

反という問題があったのではないかと思えます。

この点で林彪事件というのは何も林彪個人だけが失墜したのではございませぬ。皆さんもご承知のように、総参謀長、あるいは陸海空の司令といってもいいわけですが、とくに空軍、海軍を含めまして、総参謀部、総政治部など、いわば当時の軍の首脳がすべてといってもいいほど、つまり地方に蟠踞していた軍司令官を除き、この林彪事件に連座したわけで、一夜のうちに彼らは失墜していくわけです。このことが軍内にもたらした影響というのが非常に大きいことはいうまでもございませぬ。文化大革命というものを思い出してみますと、あのときはまさに中国の人民解放軍が奪権闘争を全面的にないまして、毛沢東の危機を救ったわけですが、それゆえにこの軍の発言力

が非常に強化された。

そのころ私は、どうもこれは、中国はいわば兵営国家ではないか、兵營体制ではないか、というようなことをいいましたら、日本の中へは、いや、むしろ中国の人民解放軍こそ、民衆と密着し、あの三大規律・八項注意に知られるように、まさに民衆の中から生まれてきた軍隊であって、人民軍であるから、その軍が横暴だなんてことをいうのは中国に対して非常に間違った見方だという意見が多かったんですけれども、実はその後、林彪事件で明らかになったように、この軍の台頭に對しまして、党官僚や行政官僚が非常に脅威を感じていたわけでありませぬ。今日ではまさに私がいった言葉と同じように、林彪は軍事管制、軍事独裁をやろうとしたというふうに批判されている

わけでございます。

こういう批判があるだけに、軍の中に与えた動揺と影響力というものは非常に大きかったと思います。そして、このことは同時に、林彪事件以後のリーダーシップに対する軍人離反という問題をもたらしました。とくにこの林彪事件についても、ある意味では中立的であり、文化大革命のときも中立的であって、自分の足もとを固めていた地方の軍司令官、すなわち陳錫聯、これは瀋陽軍区を長く支配しておりました。あるいは南京軍区の許世友、その他のそういう人物の動向というものが注目されたわけでございます。

反潮流・反復辟

三つ目は、リーダーシップの危機という問題で

がもたらした後遺症が大きいとすれば、それをやはり修正してゆかなければいけない。それから軍の離反が大きいとすれば、それをなんとか、その軍と党、あるいは政府との間の橋渡しをしなればいけない。それから、旧幹部の中で復権しうる人たちは復権させなければいけない。というところから、実は林彪事件以降、脱文革、あるいは旧幹部の復権という動きが進んでいたわけです。

これは、実は広い意味での非毛沢東化であり、毛沢東以後の時代に備えた非毛沢東化の進行だ、というふうにも考えてもよかつたと思うんです。で、具体的には、先ほどいきました政治不信あるいは青年層の逃避的な傾向に対しては、旧幹部を復権したりして文革の悪いイメージを修正する中でこの問題が処理されてゆくというような状況が

あります。いうまでもなく、林彪は毛・周に次ぐ指導者であったわけですが、その林彪、それから黄永勝というような、いわば上層部の中の比較的若年の指導者が相次いで失脚したことによって、中央のリーダーシップの中に残った人たち、毛沢東および周恩来、あるいは朱徳にせよ、董必武にせよ、多くの軍人たちにせよ、非常に老人支配といましようか、一種のジェロントクラシーが顕著になってきたということでもあります。

これについてはもう説明することもないわけですが、こういう雰囲気は昨年はいまごろ、あるいはそれ以前に中国の中にあつたことは否定できないと思います。そこで、こういう状況の中で出てきたのが、この脱文革、あるいは復辟、旧幹部の復権という状況ではなかつたか。で、文化大革命

ありました。

実は、この問題を指導したのはいうまでもなく周恩来総理を中心とするところの、いわば開明的な実務的なリアリスト・グループ、行政官僚であったと私は考えているわけであります。

ところが、これに対して、昨年の十全大会直前ぐらいからといつてもいいでしょう、巻返しが起こっていたわけです。で、当時は、むしろ脱文革というものが潮流でありました。それから、旧幹部の復権、これは中国語ではご承知のように復辟といいますが、復辟が重要な傾向を占めていたわけですね。これに対して反潮流、反復辟、あるいは反復辟の運動が起こってきたわけでありまして、十全大会のときの王洪文報告というもの、それを象徴的に示していたわけでありました。

その中でむしろ周恩来は、いわばその反潮流・反復辟の流れにタジタジとして、非常に周恩来らしくな報告をしていたというのが、昨年の十全大会での周恩来演説でございました。

先ほどの二番目の軍の問題に関しては、軍の幹部が離反して地方に蟠踞しているという状況をくずしてゆくために、ご承知のように今年の一、二月、地方軍司令の異動ということが行なわれました。二〇年あるいは一五、一六年地方に存在していた軍司令官が任地を移されたわけです。

三番目の問題として申し上げましたジェロントクラシーといわれる老人体制の問題については、ご承知のように、老・壮・青という、新しい老年層、壮年層、青年層の結合ということが叫ばれてきたわけでございます。このようにして、いわば

脱文革という潮流に対して反潮流が出てきた中で批林批孔運動が巻き上がったということをご記憶いただけるとたいへんありがたいわけです。

毛沢東と周恩来

このことを考えてみますと、ではいったいこういう反潮流を鼓吹したのは誰であったか。私は、先ほど申しましたように、脱文革を指導してきたのは明らかに周恩来であったと思う。この周恩来は、一般的には毛主席とのコンビネーションという形に見られておりますが、そしてその毛・周両首脳が天寿を全うされなければこの問題についての結論が出ないと思うんですが、私はどうも両者の関係というのは林彪と毛沢東とか、劉少奇と毛

沢東とは違った、もっと実は深いところに対立が潜在していて、しかも周恩来ほどの綱眼な指導者ですから、それが表に直接出るというようなやり方ではなくて、非常に深い戦略的な背景を持って、常にこの毛沢東政治というものの揺れ動きを修正してきているわけですね。その周恩来からしますと、まさに文革以降の、林彪事件以降の脱文革の過程というものは、やはり、さっきいきましたような、彼が非常に国家的な使命感にのっとり、毛沢東なきあとの時代に備えるべく、いわば広い意味での非毛沢東化、つまり毛沢東路線の修正を開始していたのではないかと思うのです。

で、それはかなり成功したように見えました。ニクソンの訪中であるとか、日中国交回復であるとかいうのは、そういう内政的な脱文革という状況

の対外的な反映として、いわば中国自身が徐々に世界に向かって開かれた社会になろうとしてゆく、そういう脱皮の過程の中で起こったことだろうと思うのです。

ところが、どうも周恩来などの、いわば中国を徐々にこの開明的なオープンソサエティのほうに移行させてゆくという試みに対して、再び内部から抵抗があったわけで、それがまさに潮流をせきとめて、反潮流のほうにもう一度戻そうという反潮流運動であり、旧幹部の復権ではなくて、もういっぺんその復権を阻止するという反復辟であり、たとえば今年の五、六月に見られたような壁新聞によるところのこの批判であったと思うのです。ちなみに、今度の壁新聞の批判を見ておきますと、党委員会に対する批判ではなくて、革命委

員会に対する批判が非常に多かった。革命委員会を指導しているのは國務院でございまして、つまり、文化大革命というのは党に対する批判だったわけですけども、今回の壁新聞の中に出たような片鱗というのは、まさに国家行政機関に対する批判であって、その点でも周恩来という存在が一つの意味を持つんだらうと思います。

「五七一工程紀要」の意味するもの

私がそういうような仮説を立てているところへ、実は周恩来自身が昨年 of 十全大会で非常に衝撃的なことを話している。皆さんもお気づきかもしれませんが、林彪事件について、彼が公式に初めて言及いたしました。林彪はそういうけしからん反毛の陰謀を企てて、そのためにモンゴ

ルのウンデルハンで墜落死した、と。これがはたして事実であったかどうかはいくつかの問題がありますけれども、ともかくそういう発言をしました。

さて、その周恩来は続いて、この林彪事件の経過についてはもうすでに中国の民衆は全部知っているの、いまさらこの壇上で説明する必要はないというようなことをいまして、そのときに「五七一工程紀要」というものが広く流布されているということを、周恩来が党の政治報告の席上で公式に触れたわけです。

例の「五七一工程紀要」については、もう私がかどくどと申し上げるまでもなく、林彪の反革命陰謀の書とされているものです。五七一というのはウー・チー・イー、つまり武起義のことで武力蜂

起を意味するわけでありませうけれども、この「五

七一工程紀要」はわれわれもすでに入手して見ることが出来るわけですが、実はこれが中国に広く流布されたということ。これは実は非常に重要なことだらうと思うのです。ご承知のように、中国というのは、『人民日報』はたとえ林彪事件などを一言も報道していないわけですけれども、いわばその幹部の間で流れる新聞や内部文獻などがありまして、そういうところではこういうものが流されるわけですね。そういうものを私は『人民日報』などの頭教的なメディアに対して密教的なメディアというんですけど、密教的なメディアのシステムを通じて広くその「五七一工程紀要」というものが流された。あるいは幹部から伝達されて大衆はもうすでにそれを通じて林彪の罪悪とい

うものを知り尽くしていると。

この「五七一工程紀要」というのは、毛沢東をB52というふうにとえまして毛沢東がいかに反人民的な人物であるか、そのために毛沢東を殺害しなければいけないという意図と、そのための筋書きが書いてあるわけですね。で、林彪がこれほどの悪事を働いたんだ、といっているんですけども、はたして林彪がそのようなことを企てたかどうか、これはまだナゾでございませう。

ただ、私が申し上げたいのは、その「五七一工程紀要」というものの中に二つの衝撃的な文章が入っている。一つは、「毛主席は現代の秦始皇であり、専制暴君である」という箇所でございませう。それから、もう一つは「毛主席は、マルタス・レーニン主義の衣をかぶりながら実際には孔孟

の道を進むものであって、真のマルクス・レーニン主義者ではない。まさに孔孟の道を進もうとしているのが毛主席であり、毛沢東思想というものはそういうものだ」ということが書かれている。

これは実は非常に重要な意味を持つのではないか、毛沢東はもしかすると専制暴君ではないか、つまり現代の秦始皇帝ではないか。あるいは毛沢東こそ孔孟の道を進む者ではないか、というその批判というものは、ある意味では、毛沢東に対する非常にリアルな批判ともいえるわけで、中国の民衆たちが心のどこかに感じていたことをこの二つの文句はいつているのではないか、という気がするわけです。

ということとは、これが流布されることは毛沢東の側にとっては非常に困ることでありまして、非

して不信を持っていたんだ。初めから自分は林彪を信頼したのではない」ということもやっぱり大衆に流したわけでありまして。

毛沢東の反撃—揚秦反儒の運動

すなわち、こういうドラマティックな背景があるわけなんです。ということとは、毛沢東ないしはその側近の側にとりましては、これは林彪が書いた悪い言葉だといわれながら、しかしながら、非常に民衆に衝撃を与えるような言葉が大衆的に流布された以上、その影響というか、価値観というものを転換する必要がある。つまり、毛沢東が秦始皇帝だといわれたならば、秦始皇帝は専制暴君どころか、革命君主であったという価値観の転換が必要になるわけでございます。まさに批林批孔運動

常にトゲの多い言葉です。毒を含む言葉です。この毒を含む言葉だということを周恩来が承知のうえで、それをあえて流布させたということは何を意味するであろうか、私は、実はそこに非常に深い周恩来戦略といえます。脱文革以来の毛沢東なきあとの非毛沢東化へ備えて一つのこの国民に対するいわば教育として、こういうものを、それをそういう林彪の悪事だということでもカムフラージュしながら流布させたんじゃないかという気がするんです。しかも、当時はむしろこの脱文革の潮流がとうとうとして流れておりましたので、毛沢東としてもそれを防ぎえなかつた。で、毛沢東はそのころ旅先から妻の江青女史へ宛てた手紙などを公開せざるをえなくなりまして、「自分はずもともと林彪については、林彪の猜疑心に対

というものが、この「五七一工程紀要」の流布された直後からまず始皇帝礼賛として、つまり揚秦運動として起こったということを示しています。秦の始皇帝をたたえる運動、始皇帝は革命君主だとして批林批孔運動が始まったということは、まさに従来の中国にあった始皇帝像の転換というものが必要であったということを物語るように思うわけなんです。

それから、もう一つは孔孟の道の問題でありまして、これも『毛沢東語録』、これは林彪が編んだものにせよ、ああいう語録というふうなこともって大衆に語ることでそのものが、孔子の『論語』と同じではないか。あるいは毛主席はしばしば地方を巡遊する。この地方回りをして民意をたずねるなんていうことも、ある意味では孔子と同

じかもしれない。こういうことを含めまして、しかも毛沢東はしばしば孔子を引用しているわけですから、その毛沢東が孔孟の道だといわれるのに対し、いや、毛主席こそ孔子や孟子を最も鋭く批判してきたんだという、いわばそのイメージの転換が必要だったわけでした、そこで起こったのが、毛主席みずからが指導し発動した孔子批判運動としての批林批孔運動、つまり孔子批判のキャンペーンであったというふうに考えざるをえない。そうしますと、この運動がまさに林彪事件の余波の中から生まれてきているだけに、表向き批林ということはいながら、実はこの孔子批判、批林批孔というものが非常に急激に結びつきまして、しかもまさに突然のように去年（一九七三年）の夏以降起こってきたということの背景がかなり

解明できるのではないかと思うのです。

毛・周以後への移行期に入った中国

そういうふうに考えてみますと、批林批孔運動はやはり非常に政治的な背景を持った運動であったわけで、しかもきわめて複雑な政治的背景を持った運動ではなかったかというふうに思えるわけです。

で、批林批孔がわき上がったから、しばらくはむしろこの周恩来に対する批判というものが前面に出るわけですけども、しかしながら、さすが文化大革命というものがもたらした後遺症のためか、林彪事件の余波のためか、いずれにせよ、決定打というものがなく、非常に不透明な、あいまいな状況のもとで今日まで推移してきておりま

す。そして、今日ではすべての人たちが、中国自身が毛沢東、周恩来なきあと、ということはいよいよ真剣に考えざるをえなくなりまして、いわばすでに歴史的移行期に入っているわけです。

そうしますと、この毛・周以後への歴史的移行期におきましては、どうもその決定打は出せない。で、いま決定打を出しても、このあとどういう変化が起こるかわかりませんから、いわば毛沢東、周恩来なきあと待ちだ、という状況がどうしても中国の内部にあらざるをえないわけですし、それが最近の中国の内政なり、批林批孔運動というものを非常に不透明なまま、あるいはあいまいなままにしている根本的な理由ではないかと思うのです。

ただ、私が申し上げましたように、この批林批

孔運動というものが、非常に複雑な政治的背景を持つていたということ。この私の仮説からしますと、周恩来総理にとっては、自分がかもしも毛主席よりも先に天帝にまみえるということはないへん残念なことでありますから、周恩来としまして、この四月、五月以来の病状の中では、ぜひとも自己の健在をほんとうに彼自身望んでいるんだろうと思います。

もとより、この周恩来病氣説に対しましても、いくつかの推測があるわけです。ただ、私などが得ているかなり確度の高い情報からしますと、そのすべてをここでお話しできないようなショッピングな情報も実はあるわけですけども、はっきりしていることは、単なる肉体的な病氣ではない。いわば政治的な病氣というもの、私は七〇%

政治的な病氣だと思えますけれども、そういう状況の中でこの周恩来のリーダーシップというものが、どうもまた再び低下しつつあることも事実でございます。もちろん、だからといって、今日の中国が周恩来を失うことの損失と、そのことがもたらす影響を考えた場合に、たとえ周恩来戦略に對する批判があつても、つまり周恩来がそういう非毛沢東の戦略を進めてきたことが文革派に露見してしまつたわけですが、にもかかわらず、この周恩来を完全に批判し尽くすこともできないというのが、いまの中国の現状ではないかというふうに私は考えております。

そうしますと、やはり、この全国人民代表大会が開かれるようになかなか開かれぬという、いちばん冒頭でお話ししたような問題のカギも、実

はこの辺のところにあるような気がいたしました。私はどうも、周恩来は全国人民代表大会を早く開いて国家体制を固めたいのだが——現に周恩来は全人代を開きたいといっています——これに對して、毛沢東やいわば宮廷派といひましようか、毛側近の人たちはどうもそうではないといふところに一つのポイントがあるような気がいたします。いずれにしても、そういう背景があるだけに、この中国の内政というものは非常に流動的な、変化の多い可能性を同時に残しているといふことを指摘せざるをえないわけでございます。

日中貿易に暗影

さて、中国の内政ということはそのぐらいいたしまして、次に、この日中関係を中心とした問

題に論点を移していきたいと思っております。中国の内政がそのように不透明だということの反映もあるわけですが、一方では、このところ日中関係というものが、その進展が期待したほどではなかったのではないかという感じ方がかなり出てまいりました。

私は、当初から日中関係については、とくに中国はあれだけの人口を持つているから一人が靴をはいてもたいへんなマーケットになるというような考え方、あるいは中国に再び夢を求め、いわば幻想的な中国観についてはむしろ批判的でございます。まして、日中兩國の異質性と中国の現状というものをも十分わきまえたうえで対処すべきだ、という意見を持っております。たとえば自動車にしましても、こんにちの中国が日本の乗用車のマーケ

ットになるような、そういう高度消費社会ではありえないということ。もしもいまから一〇年、一五年、二〇年たったあとにそういう条件になつても、中国自身が自動車は自力更生のもつともしやすい目標にするわけですから、トラクターなどもかく、日本の乗用車が中国へ出てゆくということも、それはマーケットという点から考えても、とても無理であるということはいひつけてきたわけでございます。どうも最近では、はやくも日本貿易関係にはやや灰色の色彩が見えてまいりました。これはやはりかなりよく検討しておく必要があるのではないかと思います。

現に、九州貿易会を見ますと、今年の春初めて交易会の成約高が大幅に減退いたしました。この秋の交易会も同じような状況が見えまして、成

續は不振であったわけです。そのうえ、日中経済関係にはいろいろ問題があるわけでした。たとえば生糸の問題、あるいは肥料の問題、それから機械、プラント、鋼材、その他の貿易問題でも、いくつかのむずかしい問題が出てきているわけです。

肥料交渉なども、毎年毎年難航してきた。つまり日本の肥料業界にとっては、一時は肥料産業はかなり不振だっただけに中国市場というのは非常に重要だったわけです。ところが、今度は世界的なオイル危機以来の状況の中で、むしろ需要に対して供給が追いつかないような状況になりますと、中国だけに、しかも安い価格だけで中国と取引するわけにもいかないというようなことも出てまいりまして、いくつかいろいろな問題が出てき

ているわけです。

で、機械などにしましても、あるいはプラントなんかにしましても、中国に出したプラントや機械は、現在までのところは一種のご祝儀値段で出しているわけですが、これが持続的にご祝儀値段だけで続くかという点、そうはいかないわけでした。ここにもいくつか問題がございます。ましてや不況下のインフレという日本の状況からすれば、コストの点からも安くばかりはできないわけでございます。

外貨不足に悩む中国

そういう問題がある中で、最近目立っていることは、新聞にも出ておりましたけど、中国のほうから、たとえば肥料や鋼材なんかにしても船積み

延期してほしいとか、支払いを延期してほしいとかいうことをいってきているわけです。これは従来、中国市場に対する非常に明るい期待とともに、中国は非常に豊かな外貨準備を持っているのではないかという、そういう推測がありました。それゆえに中国に対する明るい希望になったのだらうと思いますが、そういう期待からするとショックングなことであるわけです。

もちろん、中国の金外貨準備については発表されないわけで、いくつかの推測的なデータがあるだけで、いつもこれは議論のごさいました。明るい見方としては、どうも中国はたくさんおカネがあるように見えるけど、いったいどこからくるんだらうか、新疆の奥で金鉱でも開発されているのではないか、というような話さえあったわけ

ですけれども、それは実は一つの幻想であったわけですね。最近の事実が示しておりますように、実は中国もかなり外貨不足に悩んでいるということが明らかになったわけです。それが数年前までは、中国自身が非常にクローズなソサエティでありまして、米中関係や日中関係がなかったがゆえに非常に豊かな金外貨準備があるように見えましたが、中国自身が外へ窓を開かざるをえなくなりました。ここ一、二年急速に西側諸国からいくつかの商品やプラントなどを輸入してみますと、もうすでに中国自身の外貨不足ということが出てきているというふうになっているわけです。

現に、ニューヨークのファースト・ナショナル・シチー・バンクなどが推測しているところによりますと、本年（一九七四年）は中国は貿易収支の

赤字だけで七億三〇〇万ドル、あるいは八億ドルにのぼるのではないかと推測もあるわけです。昨年についても、これはやはり推測値でありませけれども、対先進資本主義諸国との貿易だけで約一二億〜一三億ドルの貿易収支の赤字を出しているというふうなことがいわれているわけで、これはおそらく昨年来約一〇億ドル以上のプラント、とくに石油化学プラントなどを中国が輸入しているところから見ますと、このぐらいの赤字は当然出るんだらうと思います。

こういうふうに考えてみますと、どうもその日中貿易というものにも、単にそのマーケットとしての問題だけではなくて、外貨の問題やその裏側の中国の輸出余力ということからしても、いくつかの問題が実は出はじめているわけです。

中国石油の可能性

そこで、だが中国には石油があるのではないかという意見があるわけですが、私はこの点での技術的な問題については全くしろうとですが、中国研究者としての目から見ますと、この点でもやっぱりそう甘い期待は持てないと思います。中国自身がまだまだ工業化、ティク・オフをはじめたばかりでございまして、どれだけの輸出余力があるかということと同時に、まだまだ技術開発その他でもって、この石油輸出余力も十分だというふうには思えないこと。もちろん中国はかなり犠牲を払って、いわば中国自身が批判している資源外交を中国自身もやるわけですが、しかしながら、これもわれわれにとつて楽観

的なものだけではございせん。これは実は日本の新聞の報道の仕方も悪いですね。前にもお話ししたかもしれませんけれども、アブダビとかドバイなどはハイジャックでも起こらないと新聞は教えませんから、そんな国があったのかというふうに一般の国民は考えるんですね。ところが、中国から一〇〇万トン石油が輸入されると新聞は大見出しで何段かで書きますので、そこにも一つの中国報道の問題があるわけですが、昨年はご承知のように一〇〇万トンの石油が現に日本に入ったわけです。しかしながら、これは日本の石油総需要の二百数十分の一だらうと思います。で、今年も四五〇万トンですが、中国から石油が入ったわけです。来年はその倍、あるいは一〇〇〇万トン近いのではないかと推測するにいわれ

おります。

これはある意味では、石油危機以来この問題に悩んでいる日本にとっては非常に朗報だろうと思えますけれども、しかしながら、この点について、一つは、それがどこまで伸びるかという問題がございまして。日中貿易全体についても確かに絶対値が低かっただけに、一一億〜一二億ドルから二〇億ドルぐらいまでのところまでは急激に伸びるわけですが、それ以上どこまで伸びるかということが問題である。同様にこの中国からの石油についてもまずそういうことがいえるわけです。

それから、もう一つは価格の問題、これは日本の新聞報道の問題なんですけれども、中国から石油がいくら入るかという量については大きく書きませんが、ではいったいいくらで日本は買っている

のかということは一言も報道していません。たしか、『日本経済新聞』がちょっと報道されたぐらい、あるいは英字紙の中では報道されていますね。おそらく皆さん方の中にもご専門の方で私以上にお詳しい方がいらっしゃると思いますけど、一般には中国から入る石油は高いのか安いのか、ほとんどこの問題は報道されないんです。ところが、昨年の石油はいくらで買っているかということ、たしか船積み価格にしまして、一バーレル〇一二ドル六〇〜八〇セントです。一二ドル強ですね。ということになりますと、アラブ諸国から買う石油よりも昨年でもすでに非常に高い石油を日本が買っていることになります。インドネシアの石油と、ほぼ同じぐらいでございます。で、今年の交渉は実はこの問題で皆さん難航したわけでは

すね。一時は中国は一バーレル〇一六ドルというような主張もいたしました。しかしながら、ようやく妥結しました。たしか一四ドル六〇〜七〇セントになったはずでございます。

で、最近メジャー、すなわち国際石油資本が石油価格を再び値上げしたわけですが、しかしながら、メジャーの石油価格は一バーレル一〇ドル五〇〜六〇セントだろうと思うのです。OPECの価格もそうです。そうしますと、中国からの石油が入るといって手放しではたして喜んでいられるかどうか、実は中国はアラブの石油闘争を盛んに鼓吹して「石油を武器としてたたかわれたアラブ諸国の勝利であった」といっています。アラブの石油闘争を鼓吹すれば、それだけ、ただでさえ高い中国自身の石油が高くなるわけですから、

つして日本にとっては手放しで喜べない。非常に高い石油を買うということでございます。

で、再び自力更生的なことをかなり主張してきております。

資源・食糧・人口・海洋権問題での中国の立場

これも当面、日本にとってはいわば石油輸入の代替地を拡大するということで、アラブ以外にもいくつかの選択肢を設けるといふ意味では非常に大きな意味がありますけれども、いわば安定的な石油供給源としては、まず中国自身の能力という問題、そして、非常にそれが高いということもありまして、ここにも大きなデッド・ロックがあるわけですよ。

日本自身は資源を輸入しなければいけない。輸入価格が高くなれば製品コストにはね返ってこざるをえないという状況から、日中貿易にもいくつかの暗い影をもたらすと思います。そして中国自身も、そういう限界にそろそろ気づきはじめまし

今年春の国連資源総会における鄧小平副総理の演説は非常に印象的な、ある意味ではショック的な演説でありまして、キッシンジャーなんか盛んに主張するところの国際的な相互依存関係の増大ということを頭から批判いたしました。「二〇〇〇年をいうのは覇権主義の論理である。帝國主義の論理である。中国は第三世界の側に立つ」といい、アラブの石油闘争を鼓吹し、それから「人口がふえ過ぎて困るといふのは侵略者の論理である。人口は多いほどいいのだ」ということを

いい、海洋法の問題ではなんと領海二〇〇海里と
いったのです。われわれの日本はいま三海里の立
場ですから、それがやがて国際的な常識ラインと
しての一二海里になるんではないかといっている
ときに、中国は二〇〇海里ということはい、
それから、食糧の問題でも同じような原則的主張
をするというふうに、石油危機以来の新しい国際
的な重要な問題に関して、中国自身はその原則に
おいて、日本と全く一八〇度違う立場を主張して
いるわけでありませう。

こういうことから見ますと、実は日中関係には
日本自身の国益なり、日本自身の国家の体質、つ
まり、日本自身はもう九〇%以上資源を対外依存
せざるをえないという、そういう島国であり、海
洋国家であるという現実と、中国というような、

し、技術や、日本の工業文明というものをぜひ中
国自身が学び、輸入することを必要としているわ
けでございます。

このことが実は日中関係をして、根本的には大
きな違いがあるにもかかわらず、それをカムフラ
ーージュさせているわけです。それが先ほどの貿易
関係のデッド・ロックのように、いつまでそのカ
ムフラージュが続くか、部分的にはそのカムフラ
ーージュはくずれてきているわけですが、それだけ
に私たちは日中関係の現実を十分じっくり見てい
かなければいけないと思います。で、日本人はし
ばしばそういうときに、今度は急にソ連のほうに
顔を向けたりするわけですが、そういうことはま
ずまず日中関係を困難なものにするだけに、どう
も私自身前々から申し上げてきましたように、長

この潜在的にある程度のアウタルキー、自給が可
能である大陸国家が根本的に体質が違うという、
その体質の違いにもわれわれはもういっぺん目を
向けていかないといけないわけでございます。

こういう中国の批判にもかかわらず、いま現在
日中関係が非常にうまくいっている。これは日中
が国交樹立間もないということもありましようけ
れども、そして、田中・大平外交に対する中国の
期待が非常に大きかったということもありましょ
うけれども、やはり根本的にはひとえに中ソ関係
にかかっているように思っています。中ソ関係はや
はり非常に問題が多だけに、現在の中国として
は、対日関係を友好的にせざるをえない。そして
そのことは同時に、中国自身の経済開発にとって
も、いま日本は非常に大きな手本になるわけであ

期的に安定した日中関係を考えるには、日中双方
の違いや中国それ自体に対する深い認識ととも
に、あまり過熱したりしないクールな理性的な対
応が必要ではないかというふうに考えるわけであ
ります。

日台問題はそう簡単ではない

そろそろお話をまとめなければいけないわけで
すけれども、そういう状況の中に先ほどの台湾問
題があるわけでありまして、自民党の中にも、今
回の三木政権に確かにそれなりの考え方を持った
人が多いのはそのとおりでございます。しかも台
湾自身が、いわば徹底した民間レベルの対外関係
に徹しようとしているわけですが、もう台湾は国
家レベルの外交をあきらめ切っているわけであり

まして、そのあきらめ切ったということが非常に台湾にとってプラスしたわけで、国家関係は断絶されても、常に民間関係を維持したいという、いわば台湾の「生存の戦略」が意外に成功しているわけです。ということになりますと、単に日台関係の断絶、あるいは日中航空協定によるところの日台航路の断絶を回復するということだけではなく、やはり中国と日本とのいまいったようないくつかの経済関係におけるむずかしい問題などを考えますと、やはり日台関係を、少なくとも民間レベルにおいてはより安定的なものにしておく必要があることはいうまでもありません。そして、また、この日中国交以来の台湾とのまづい関係については、やはりそれをより改善しようということとは、そういう一つの流れがそちらの方向にゆく

ということも実は当然でありまして、そういう点ではまさに現在が一つのタイミングだというふうにも考えられないわけではないのです。

ただ、私は、そこで若干危惧を持つのは、あのときの台湾の断交というものは、単なる外交上のセスチュアや強がりだけではなかったという気がするわけです。つまり、あれはある意味での台湾の人たちの、まさに中国人としての面子の問題であつたわけですね。で、ここをやっぱりわれわれが見抜いていかないと、いいかげんなことで台湾自身も困るだろうからその話に乗ってくるのではないかというふうに考えるのでは、どうも日本のほうにまたそこでも一つの甘い対応があるのではないかと思えます。

今日の台湾にとっては、やはり、まさに面子、

いわばプレステージとプライドの問題というものがあるわけでして、それを今度日本の必要だけから日本がそちらのほうに歩み寄ってゆくということでは、どうもそう簡単に台湾側が折れてこないのではないかと思えます。つまり、それでは話があまりにもうま過ぎるわけでして、ここではもう少しやはり台湾との間のじっくりした根回しというようなものを必要とするのではないか、そのうえでこの問題についてのなんらかの形で日本側の意思表示が必要になりますし、そのためには結局中国との間にもういっぺん、いくつかの突っ込んだ話し合いをしなければいけないはずだと思います。ところが日中関係というのは、これまでそういうタブーに触れずに済んできってしまったわけでありまして、田中さんが首相になったときに、ワ

ッと日中国交正常化を行なったのは、日中がほんとうに問題をぶつけ合ったものだとは思いません。つまり、ある意味ではごまかしのうえに成り立っている。つまり、なぜ日本が日華平和条約というものをあのサンフランシスコ体制のもとで結んだのか、それはつまり、占領下の日本が当然余儀なくされたことであつて、実はそこから発生した日本と中国、台湾という問題は中国人自身の問題だ、ということをも日本人はほとんどいわずにこの問題を過ごしてきたわけでございます。ですから、やはりその点で中国側とも、あるときはけんかしてもいいからという必要があつたんですね。まさにあの友好の時点でそれが必要であつたんですけど、それをいわずにきってしまったというところに、実はいくつか問題がありはしないか。

日中平和友好条約と中ソ関係

このことは、日中平和友好条約という最近の懸案についてもいえるわけでして、もしも日中平和条約というものが、かつての国交樹立のときの日中共同声明と同じように、ただ和気あいあいとしたきれいな文句だけで条約が結ばれるとしたならば、そして領土問題とか、さっきいった海洋権の問題、こういう問題をすべてタナ上げして、もしも条約が結ばれるとするならば、これはたいへんあとに問題を残すわけでございます。少なくとも条約というのはまさに国家百年の計を考へるべきでありまして、たとえば領土問題一つとりましても、もしこれをタナ上げにして日中平和友好条約が結ばれるとします。しかも日中間の

できるだけ妥協点を探ると同時に、たとえ、問題をタナ上げする場合でも、日中間の問題と北方領土問題というソ連との戦後処理問題とは、性格が根本的に違うのだということをソ連側にもわからせるような外交交渉をすべきだと思います。

そして、実は、詰めてみる必要がある問題としては、いったい将来中ソはどうなるかということが非常に重要なので、私はほんとうはそれは一九八〇年まで待つてこの詰めに時間をかける必要があると思うのです。というのは、一九八〇年には、例の中ソ友好条約が三〇年の期限が切れるわけですし、いまからもうあと四、五年ですから、この間に中ソ関係を含めて日本にとっての重要な課題に関し、冷静な詰めが必要ではないか。北方領土問題にしてもこの四、五年のうちにもしもこ

領土問題というのは、尖閣列島というほんとうに小さな問題ですね。これさえも日本が解決できずに、タナ上げして平和条約が結ばれますと、ソ連はもうここぞとばかりに手を打って、それじゃソ連とも領土問題をタナ上げして平和友好条約を結びましょうと、もうまさにトロヤノフスキー駐日大使のこの間の発言にもその片鱗が見えていますので。……

そうした場合に日本としては、やはりその提案を受けざるをえない立場になりますね。ということは、北方領土問題という大きな懸案を永久的に日本があきらめることにもなるわけでして、少なくともこの問題は、いくつかの問題をごまかさずに詰めてみる必要があると思うのです。

領土問題や領海問題でも中国側と話し合って、

の問題を詰めることができないならば、これはもう永久的にできないわけでして、それでいいのかどうかということも含めてまた考えてみる必要があるかと思えます。しかもこの四、五年というのは、おそらく中国でも毛・周なきあとの時代へ移行してゆく時代として、非常に大きな転換がありうるかもしれない。そのときに中ソがどうなるかということも一応見きわめたいので、あるいはそういうことも視野に入れたうえで、日中平和友好条約についても考へるべきだと思います。私はこの点で少なくとも四、五年後の中ソ関係や中国自身の変化の可能性を視野に入れて当面の日中交渉、日ソ交渉に当たる必要がある、ということとを最後に申し上げまして、私のつたない講演を終わらしていただきたいと思えます。(拍手)

宮川 非常にわかりにくい相手をかかえておる日本としても、非常にやっかいなわけでございますが、まあ、きょうお話のことを頭において、今後の近隣外交を見ていきたいもんだと思います。

今年、七四年には世界中の政府がみな政權交替をやっております、だれか勘定した人が、日本の田中内閣がやめたのは一四番目で、一五番目はもしや中国でもないかと、こういう話も出ておりますが、まあ、いずれにしてもこの近隣外交は非常にやっかいでございます、宮沢外務大臣は記者会見で「日ソ、また日中関係は、これは非常に慎重にやっていかにやらぬ」というふうなことをいっておられますし、三木さんはバルカン政治家といわれるくらいだから、こういうやっかいな近隣外交をなんとか処理してゆくであろうとい

う淡い期待を持っておるわけでございます。今年はこれで葬れましても、来年あたりはこの外交問題がもつとはつきりと浮かんできるのであるうと思ふんであります。きょうはおかげさまでたいへんよく中国の状況もある程度わかりました。ありがとうございます。(拍手)

講師略歴

(二月一三日)
昭和三五年東京外語大中国学科卒。四〇年東大大学院国際関係論課程卒。現在東京外語大助教授、国際関係懇談会(外務省)委員、アジア調査会委員。国際関係論・現代中国学専攻。著書多数。

後記

中嶋嶺雄先生から、中国の全国人民代表大会をめぐって、毛沢東・周恩来それぞれの立場を綿密に分析していただき、統一と団結を強調する最近の内政事情とにらみ合わせた興味深いお話と、これからの日中関係について積極的なご意見をお聞かせいただきました。

高橋忠雄先生は、東洋経済から『肝臓病の正しい知識』を出されておりますが、直接のお話は理解しやすく伺いました。

高橋亀吉先生は、今回のスタグフレーションの特徴を説明され、原産品供給不足による物価騰貴が日本経済の国際競争力を減退させておる点、設備・人員・経費などの問題を適切なタイミングによって解決せねばならぬ点を指摘されました。

白井浩司先生が、かつて体験された慶大の学生紛争の際、新聞紙上に報道された矛盾点を指摘されるとともに、大学自治会の現状、南・ベトナム・韓国問題など広範にわたってマスコミに対する見解を披瀝されました。(中央会)

定価 180 円
昭和50年 2月20日発行
経済倶楽部講演 (昭和50年 2月号)
(無断転載を禁ず)
編集発行 宇 梶 洋 司
兼印刷人
東京都中央区日本橋本石町1の4
発行所 東洋経済新報社
電話 東京(270)代発4111
振替 口座東京 6518